



小さな親切

みなさんは、「小さな親切運動」についてご存知の方も多いでしょう。

ここで、第44回「小さな親切」作文コンクールで【内閣総理大臣賞】を受けた、静岡県の大谷紗耶香さん（中学3年生）の作文を紹介しましょう。

これは、私が中学三年生の夏休みのできごとです。

その日私は、隣町で行われているお祭りに友達といっしょに行こうと、電車に乗っていました。電車の中はたくさんの人であふれていて、冷房がかかっているのも分らないくらいでした。そこには、甚平を着ている一才にもならないくらいの男の子が、ベビーカーに乗ってお母さんとみられる女の人といっしょにいました。私は（かわいいな）と思いながら見ていました。

そうして電車に揺られていたら、突然そこにいた男の子が声をあげて泣きだしました。電車の中は一瞬ざわつきました。私は、（まあ小さい子だし、すぐに泣きやむだろう）と、そのままいました。そのとき、電車に乗っていた50代くらいの男性が、「うるさいな。静かにさせろよ。」と言いました。きっと私を含め、その電車に乗っていたほとんどの人が、その男性のひとことで不愉快な気持ちになったと思います。

その男の子のお母さんも、不安そうな顔をしながら謝ることしかできずにいました。私は、（それは違うんじゃないか）と男性に言いたいと思っても、喉からは誰にも聞こえないような小さな声しか出ませんでした。

そんなとき、電車に乗っていた二人の高校生らしき男子たちが、「いないいないばー。」と声をかけたり、手で自分の顔をつまんだりして、男の子のそばに近寄ってきました。最初はずっと泣いていた男の子も、しだいに笑顔になっていきました。そしてお母さんは、さっきの不安そうな顔など思い出せないくらいの笑顔で、「ありがとう。」と言いました。

高校生たちは、「たくさん泣いて、元気な子になるんだぞ。」と言って、笑顔で電車を降りていきました。電車に乗っていたみんなが、さっきの不愉快な気持ちから、温かい気持ちに変わったと思います。

そのあと私も電車を降りて、友達とお祭りを楽しんでいたら、さっきのベビーカーの男の子とすれ違いました。そのときの男の子の笑顔は今でも忘れられないくらいにキラキラしていました。

あの高校生の行動、「小さな親切」が、あの小さな男の子の笑顔を守ったんだと思いました。私は「言いたかったけれど、怖くて言えなかった」という後悔が、心に少し残りました。その一方で、（次は勇気を出してみよう）と思えました。

高校生がお母さんと男の子を助けるために行った親切が、間接的に私にも勇気を与えてくれる「小さな親切」となりました。このできごとをふまえて、私も誰かの笑顔を守れるような、また誰かに勇気を与えることのできるような人になりたい、と思いました。

心が温くなる話です。防府にもこのような高校生（子どもたち）が増えてくるといいですね。また、今年は、オリンピックで世界各地から人々が集まります。日本の素晴らしい姿を見てもらえるといいですね。

（文責＝青少年育成センター指導員 藤村）